

通常の学級における多様な子どもの「参加」を大切にする授業実践

琉球大学大学院 教育学研究科(教職大学院)

うるま市立彩橋小学校 鈴木 陽子

1. はじめに

<共生社会とは>

- ・一人一人が積極的に参加・貢献できる社会
 - ・人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会
 - 「我が国において最も積極的に取り組むべき重要な課題」(中央教育審議会 2012)
- ・共生社会の形成に向けて、誰もが参加しやすい社会をつくることが求められている。
 - ・通常の学級、授業は、誰もが参加しやすい学級、授業になっているだろうか。

2. 実践の目的

通常の学級において、多様な子どもが参加したくなる授業づくりを工夫し、それぞれの参加の意義を明確にした授業実践を行うことを通して、授業づくりに大切だと考えられる要素を明らかにし、共生社会の形成に向けた授業のありかたとして提案することを目的とする。

3. 対象とする児童

- ・小学校3年生(通常の学級／特別支援学級(知的)／特別支援学級(情緒))の児童
- ・個別の対象児について、授業への参加の様子や変容などを記録して考察する。

4. 授業づくりの視点

(1)参加したくなる授業の工夫

子どもが「参加したい」と思う授業づくりを工夫し、授業に向かう主体的な姿などの子どもの行動や様子をふまえて試行錯誤しながら実践を行う。

(2)参加の意義を明確にした授業の工夫

自立活動の内容をふまえた授業づくりを行い、対象児の目標の設定、支援や見とりを行う。

5. 授業実践の紹介

(1)お店調査隊プロジェクト(社会・算数・国語)

「お店」をテーマに子どもが「知りたい」「調べたい」ということを整理し課題を解決していく過程で、社会(「店ではたらく人と仕事」)、算数(「表とグラフ」)、国語(「仕事のくふう、見つけたよ」「気持ちをこめて『来てください』」)の各教科・単元の指導事項を押さえながら全 25 時間の学習を進めた。

(2)山小屋で三日間すごすなら」(国語・図工)

「子ども探検隊として、山小屋で三日間過ごす」という目的で、「何をして遊ぶか」「何を持って行くか」をグループで話し合う国語の学習を行った。並行して、「山小屋で過ごす・遊ぶ」イメージを疑似体験できるように、図工で教室前の広場にダンボールや新聞紙等を使い工夫して「山小屋」をつくった。

6. まとめ

(1)実践から明らかになった「参加したくなる授業づくり」に大切だと考えられる要素

- ①子どもの「問い」を大切に単位計画を立てること
- ②子どもが興味関心のあることを教材として使うこと
- ③実際に見たり聞いたりするなどの体験や疑似体験を取り入れること
- ④多様な学習形態から自分に合う方法を選択できるようにすること
- ⑤多様な表現方法を尊重すること
- ⑥教室に柔らかく楽しい雰囲気をつくること

(2)共生社会の形成に向けた授業のありかたとしての提案

次の3点が、「人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」、つまりこれからの共生社会の形成に向けた授業のありかたとして必要とされていると考えられる。

- ①「参加したくなる授業づくり」の大切な要素を意識した授業づくりを行い、主体的に学びに向かう環境をつくる。また、「参加の意義を明確にした授業」を取り込むことにより、特別な支援を必要とする子について自立活動の内容の促進を図る。
- ②教師は学習に取り組む過程で困り感のある子に対して、実態に合わせた支援をする。
- ③授業が、子ども一人一人にとって自分のありようが認められる安心感のある場であること、そして、それぞれの子どもの多様な参加のかたちを大切にする授業や教師であることが大切である。